



第56号
2011年11月28日
LET九州・沖縄支部事務局発行
〒808-0135 北九州市若松区ひびきの1-1
北九州市立大学 長加奈子研究室
TEL 093-695-3249
E-mail: secretariat@jlet-ko.org
編集：柿元悦子・田上優子・事務局

2011年度支部総会報告

LET九州・沖縄支部長 島谷 浩

第41回支部研究大会当日に開催された支部総会において、支部研究活動の活性化のために、支部紀要編集規定・執筆規定と支部プロジェクト規定の改定が提案され承認されました。すでに新規定が適用されており、支部ホームページ等で改訂箇所をご存知かと思いますが、改訂内容をご報告いたします。

1) 支部紀要編集規定・執筆規定の改定

【編集規定】

3. 内容

新	本誌は外国語教育とそれに関連する <u>研究論文、実践報告およびその他の報告（研究ノート、教材解説、書評等）</u> を掲載する。 投稿に際しては、研究論文・実践報告等のジャンルを明らかにするものとする。
旧	本誌は外国語教育とそれに関連する <u>研究論文および実践その他の報告</u> を掲載する。 ただし、執筆内容は研究大会での口頭発表等の内容にもとづくものとし、投稿に際しては、研究論文・実践報告等のジャンルを明らかにするものとする。

10. 期日

新	応募論文は、当該年度の <u>10月末日</u> までに、外国語教育メディア学会九州・沖縄支部事務局内編集委員会宛（書留郵便にて）送付するものとする。
旧	応募論文は、当該年度の <u>11月末日</u> までに、外国語教育メディア学会九州・沖縄支部事務局内編集委員会宛（書留郵便にて）送付するものとする。

【執筆資格】

新	2. 削除
旧	2. 執筆者は原稿応募当該年度における当学会主催または共催の国際学会、全国研究大会または支部研究大会において口頭発表および実践その他の報告を行ったものとする。

支部紀要の投稿は、従来は、当該年度に本学会主催または共催の国際学会、全国研究大会または支部研究大会での発表者に限られておりましたが、この制限を撤廃し、公務等の事情で研

究大会で発表ができなかった会員も、投稿できるようになりました。さらに、従来の投稿内容は、「研究論文および実践その他の報告」となっており詳細が不明確でしたが、「研究論文、実践報告およびその他の報告（研究ノート、教材解説、書評等）」として、より幅広いジャンルで投稿できることが明記されました。

規程に、「研究論文・実践報告等のジャンルを明らかにするものとする」とありますが、両者の違いについての問い合わせがたびたびありました。本支部の指針を提案し、総会にて承認されました。支部ホームページに掲載されておりますので、投稿時にご参考になさってください。

研究論文とは：

主に実証研究の手法を用いたオリジナルな研究結果を報告するもの。新たに得られた結論が広く一般的な事例に適用できるもの。

実践報告とは：

実践活動（授業など）から得られた成果などについて、一般化には至らないが、教育実践者の授業実践の改善に有益な示唆を与える具体的提言が盛り込まれているもの。

また、新規定により、支部紀要の投稿締切日が10月末日までと、従来より1カ月早くなりました。これは、投稿原稿の査読期間を確保するための方策であります。本年度は、大変ご迷惑をおかけしたかと思いますが、今後はこの期日を念頭に研究活動を進めていただきますようお願いいたします。

2) 支部プロジェクト規定の改定

（義務と報告）第4条

新	5 研究プロジェクトは研究成果を研究期間中のいずれかの時点で当学会の全国研究大会または支部研究大会で口頭発表し、かつ研究期間終了後一年以内に全国紀要または支部紀要に研究論文または実践報告として投稿することを原則とする。尚、論文の投稿については、外国語教育メディア学会機関誌投稿規定または支部紀要編集規定・執筆規定に従うものとする。
旧	5 研究プロジェクトは研究成果を研究期間中のいずれかの時点で当学会の全国研究大会または支部研究大会で口頭発表し、かつ研究期間終了後一年以内に全国紀要または支部紀要に研究論文の形式で投稿することを原則とする。尚、論文の投稿については、外国語教育メディア学会機関誌編集規定・執筆要項および支部紀要編集・執筆規定に従うものとする。

従来は、支部研究プロジェクトの研究成果は、研究論文の形式で報告することになっていましたが、新規定により、研究論文または実践報告として報告することになりました。昨年度の総会での規定改定により、他支部会員との共同プロジェクトが可能となりましたが、今年度の改定により、実践的な研究により取り組みやすくなりました。

なお、昨年度に機関誌（全国紀要）の規定の名称と内容が変更され、支部紀要の規定と異なるものとなったため（例：機関誌の投稿原稿の上限は30ページ、支部紀要の上限は15ページ）、両方に従うことはできないので、「および」が「または」に変更されています。

支部総会においては、別掲のように、2010年度支部事業報告・支部決算報告書、2011年度事業計画案・支部予算案も承認されております。ご確認いただきますようお願いいたします。

・2010年度支部事業報告

2010年

4月1日 LET 九州・沖縄支部第6回研究プロジェクトチーム（新規）

テーマ：「リーディング・アイランド 九州沖縄プロジェクト ～インタラクティブな読書コミュニティの開発研究～」 代表者：水野邦太郎（福岡県立大学）

4月24日 LET 九州・沖縄支部運営委員会（第1回）

5月15日 LET 九州・沖縄支部「支部だより」（電子版）第53号発行

6月5日 第1回 LET 九州・沖縄支部評議員会（長崎県佐世保市ハウステンボス）

6月5日 LET 九州・沖縄支部総会（長崎県佐世保市ハウステンボス）

6月5日 LET 九州・沖縄支部 支部設立40周年記念大会（長崎県佐世保市ハウステンボス）

大会テーマ：「CALL 授業の展開－その可能性を広げるために」

記念講演

講演者：竹内 理 LET 会長

題 目：「CALL 授業の展開-その可能性を広げるために」

テーマ別セッション

第1室：ICT と多読指導

第2室：ITC と ESP

第3室：ICT とリメディアル教育

7月4日 LET 支部長連絡会 場所：関西学院 KG ハブスクエア会議室

8月3日 LET 支部長連絡会・各種委員会・理事会

8月3日～8月5日

LET50周年記念全国研究大会 会場：横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校

大会テーマ：「外国語教育とメディアの更なる共生を目指して－LET50年からの提言」

10月2日 LET 九州・沖縄支部運営委員会（第2回）

11月13日 LET 九州・沖縄支部, JACET 九州・沖縄支部合同秋季学術講演会

会場：西南学院大学

講師：Dr. Coxhead, Averil (Senior Lecturer, School of Linguistics and applied language studies, humanities and social sciences, Victoria University of Wellington, New Zealand)

演題：Working with collocations, phrases and word lists: Connecting multi-word units, English language classrooms, and the Academic Word List

11月1日 「LET 九州・沖縄支部だより」（電子版）第54号発行

12月4日 LET 九州・沖縄支部運営委員会（第3回）

12月26日 支部長連絡会 場所：大阪ガーデンパレス

2011年

2月19日 LET 九州・沖縄支部運営委員会（第4回）

3月24日 LET 九州・沖縄支部運営委員会（第5回）

3月31日 LET九州・沖縄支部紀要第11号発行

<研究論文>

Needs Analysis: How Do Stakeholders Perceive What Junior and Senior High School Students Want?

KAWANAMI Kazuya

<LET九州・沖縄支部研究プロジェクト報告>

中学生の「書く力」を高める授業のあり方の研究

—「論理の一貫性と意味のある英文を書く力」の育成をめざして—

富永美喜・川尻 徳・堤 琴恵

<実践報告>

ICT と ESP

山内ひさ子・安浪 誠祐・荒木瑞夫

※LET九州・沖縄支部理事会，研究大会実行委員会，紀要編集委員会，「支部だより」編集委員会，研究プロジェクトは必要に応じて随時開催。

2010年度 外国語教育メディア学会九州・沖縄支部 決算報告書

2011年3月31日

収入の部

項 目	決算額 (円)	内 訳	予算 (円)	差 額
前年度繰越金	248,265		248,265	0
学会費	984,000	個人会員 @6,000 ×144件 【3件(2007), 9件(2008),26件(2009),121件(2010), 2件(2011)】 864,000 団体会員 @6,000 ×17件 102,000 学生会員 @3,000 ×6件 【1件(2008), 5件(2010)】 18,000	840,000 15,000	126,000 3,000
雑収入	654,282	1.展示協賛金 480,000 支部大会展示 2.広告掲載料 40,000 支部紀要第10号への広告掲載料 3.寄付金その他 60,000 ご祝儀、講師謝礼辞退等 4.紀要投稿料 67,000 第10号紀要投稿料 5.学会当日会員資料代 7,000 第40回記念支部研究大会 6.利息 282	611,000 500,000 1,000 100,000 10,000 -	43,282 20,000 59,000 ▲ 33,000 ▲ 3,000 282
支部積立金より繰入	500,000	支部積立金より繰入	500,000	0
合 計	2,386,547		2,214,265	172,282

支出の部

項 目	決算額 (円)	内 訳	予算 (円)	差 額
支部大会開催費	846,827	第40回記念大会開催費(会場使用料、ドリンク代、講師謝礼、来賓旅費・宿泊費、功労者表彰記念品代、アルバイト代および支部研究大会準備金)	910,000	63,173
人件費	3,200	事務局アルバイト代	10,000	6,800
印刷費	287,225	支部紀要第10号印刷費(2009年度分)138,000円、第40回記念支部研究大会発表要綱・事務局封筒印刷費・資料印刷等(2010年度分)149,225円	300,000	12,775
通信費	124,810	送料	150,000	25,190
会議費	39,356	支部運営委員会、紀要編集委員会、支部大会実行委員会等の開催に伴う経費	50,000	10,644
謝礼費	48,000	事務局謝礼	48,000	0
旅費	175,000	運営委員会、紀要編集委員会、第40回記念大会実行委員会参加補助費として	250,000	75,000
事務局費	28,944	宛名ラベル、領収書、文具等	50,000	21,056
支部分担金	106,050	2010年度分95,100円、2009年度不足分10,950円	106,050	0
学術講演会	19,500	秋季1回	80,000	60,500
支部研究プロジェクト補助費	130,000	2010-2011年度支部研究プロジェクト(代表:水野邦太郎)	130,000	0
雑費	92,584	送金手数料、会費払い込み手数料、評議会弁当代	100,000	7,416
予備費	0		30,215	30,215
次年度繰越金	485,051	(2011年3月31日付支部積立金残高:2,831,131円)	0	▲ 485,051
合 計	2,386,547		2,214,265	▲ 172,282

以上、報告します。

外国語教育メディア学会九州・沖縄支部

事務局長 長 加奈子



以上、相違ありません。

会計監査 松崎 徹



会計監査 林 千晶



・2011年度事業計画案

2011年

4月1日 LET九州・沖縄支部第7回研究プロジェクトチーム（新規）

テーマ：「英語母語話者と日本人学習者における受動文の用法比較 ―認知言語学と英語教育学的観点から―」 代表者：冬野美晴（西南学院大学大学院生）

4月30日 LET九州・沖縄支部運営委員会（第1回）

5月15日 LET九州・沖縄支部「支部だより」（電子版）第55号発行

6月4日 第1回 LET九州・沖縄支部評議員会（筑紫女学園大学）

6月4日 LET九州・沖縄支部総会（筑紫女学園大学）

6月4日 LET九州・沖縄支部 第41回支部研究大会（筑紫女学園大学）

大会テーマ：「こうすればできる！小学校外国語活動」

講演

講演者：金森 強（松山大学）

題 目：『これで大丈夫！小学校「外国語活動」―より良い実施のための留意点』

ワークショップ

『ICT活用で、頭が動く、心が動く外国語活動を』

前田陽子（熊本大学教育学部附属小学校）

『児童の心を育む外国語活動とは？―「英語ノート＋アルファ」』

高橋美由紀（愛知教育大学）

シンポジウム

『こうすればできる！小学校外国語活動』

コーディネーター：高橋美由紀（愛知教育大学）

コメンテーター：金森 強（松山大学）

パネリスト：池浦真理（元福岡市立小学校教諭・英語で楽しむ紙芝居研究会代表）

橋口公一（福岡教育事務所教育指導室・主任指導主事）

前田陽子（熊本大学教育学部附属小学校）

7月2日 LET九州・沖縄支部，JACET九州・沖縄支部合同春季学術講演会

場 所：西南学院大学2号館8階 大会議室

講演者：Michael Byram (Professor Emeritus, University of Durham)

演 題：The Common (European) Framework of Reference - teaching foreign languages, plurilingualism and intercultural competence

8月6日 LET支部長連絡会・各種委員会・理事会

8月6日～8月8日

第51回全国研究大会 会場：名古屋学院大学白鳥キャンパス

大会テーマ：「外国語学習での自律性と継続性」

9月下旬 LET九州・沖縄支部運営委員会（第2回）

11月1日 「LET九州・沖縄支部だより」（電子版）第56号発行

11月中旬 LET九州・沖縄支部運営委員会（第3回）

11月中旬 秋季学術講演会

2012年

1月上旬 LET九州・沖縄支部運営委員会（第4回）

3月1日 LET九州・沖縄支部紀要第12号発行

3月下旬 LET九州・沖縄支部運営委員会（第5回）

※LET九州・沖縄支部理事会，運営委員会，研究大会実行委員会，紀要編集委員会，各種研究会，「支部だより」編集委員会，研究プロジェクトは必要に応じて随時開催。

2011年度 外国語教育メディア学会九州・沖縄支部 予算

2011年4月1日

収入の部

項 目	予算額 (円)	備 考	前年度予算
前年度繰越金	485,051		248,265
学会費	723,000	個人会員 @6,000 ×104件 624,000 学生会員 @3,000 ×5件 15,000 団体会員 @6,000 ×14件 84,000	840,000 15,000 0
雑収入	508,000	内訳 1. 展示協賛金 200,000 第41回支部研究大会展示協賛 2. 広告掲載料 200,000 支部紀要第11号・第12号への広告掲載料 3. 寄付金その他 1,000 寄付、利息等 4. 紀要投稿料 100,000 支部紀要第11号・第12号への投稿料 5. 学会当日会費 7,000 第41回支部研究大会における資料代	611,000 500,000 1,000 100,000 10,000
支部積立金より繰入	0	(2011年3月31日付支部積立金残高：2,831,131円)	500,000
合 計	1,716,051		2,214,265

支出の部

項 目	予算額	備 考	前年度予算
支部大会開催費	250,000	第41回支部研究大会予算 (大会準備金、講師謝礼、講師旅費、アルバイト人件費、懇親会費補助等)	910,000
人件費	10,000	事務局アルバイト	10,000
印刷費	400,000	支部紀要第11号、第12号、第41回支部研究大会発表要綱等の印刷	300,000
通信費	100,000	送料	150,000
会議費	100,000	支部運営委員会、紀要編集委員会、支部大会実行委員会、評議員会等の開催に伴う経費	50,000
謝礼費	48,000	事務局謝礼	48,000
旅費	200,000	支部運営委員会、紀要編集委員会等への参加補助	250,000
事務局費	50,000	宛名ラベル、領収書、文具等	50,000
学術講演会	60,000	春季・秋季の2回	80,000
支部負担金	147,600	本部への支払い (0.15 ×984,000)	106,050
支部研究プロジェクト補助費	130,000	2011-12年度支部研究プロジェクト (代表：冬野美晴)	130,000
会費徴収委託費	62,500	1人500円×125名	0
雑費	50,000	振り込み手数料等	100,000
支部積立金	100,000		0
支部運営予備費	7,951		30,215
合 計	1,716,051		2,214,265

外国語教育メディア学会九州・沖縄支部

事務局長 長 加奈子

A Weekend of Language, Education and Technology in Southern Fukuoka

Review of the 41st Meeting of the Kyushu-Okinawa Chapter of the Japan Association for
Language Education and Technology (LET)

Saturday, June 4, 2011

Chikushi Jogakuen University, Dazaifu, Japan

By Judy Yoneoka, Kumamoto Gakuen University

It is a rare occurrence indeed that two major conferences on what could be considered a “niche” field—that is, the interface between language teaching and technology—happen on the same weekend in the same suburban area in Kyushu. But that is exactly what occurred on the weekend of June 3-5, 2011, when the Kyushu-Okinawa chapter meeting of the Japan Association for Language Education and Technology (LET) and the national conference of JALTCALL (Japan Association of Language Teachers CALL SIG) were held at Chikushi Jogakuen University (筑紫女学園大学) and Kurume University (久留米大学) respectively—within an hour’s drive of each other. As a board member for the former conference, an invited workshop speaker for the latter, it was a busy but fascinating and intellectually stimulating weekend for the reviewer.

In contrast to other years, the LET-KO meeting this year chose to focus not on technology and language education alone, but to specifically pinpoint pertinent issues in a timely field—that of the newly implemented foreign language (=read English) activities at Japanese elementary schools. Although this subject has been an optional part of 総合学習 (general education) for several years, it became a required course as of April 2011. As such, the theme of this year’s conference was 「こうすればできる！ 小学校外国語活動」 (Elementary school

foreign language activities: This is how to succeed!) and the morning workshops featuring veteran teachers Yoko MAEDA (Kumamoto University Fuzoku Elementary School) and Miyuki TAKAHASHI (Aichi Kyoiku University) were well-attended and drew a number of local in-service teachers.

The MEXT guidelines for implementation of the new course aim to spark interest in foreign languages and cultures, as well as foster communication abilities in general. To meet this rather tall order, both workshops presented a wide range of ideas and examples of relatively low-tech solutions that can be easily implemented in the elementary school classroom. Maeda, for example, demonstrated a simple powerpoint presentation of mailboxes (ポスト) around the world, for which students guessed their colors. In the second workshop, Takahashi introduced supplementary exercises for use with Eigo No-to (英語ノート), the official MEXT course textbooks. The audience enjoyed using colored paper and playing cards to play games in English, and then learn about their pedagogical objectives. Although the use of an electronic blackboard was also planned, the delayed arrival of the necessary equipment made this impossible. Even so, Takahashi skillfully and resourcefully demonstrated pedagogical methods of a non-technical “Plan B” nature, which was perhaps even more beneficial to in-

service teachers who may not have access to high-tech equipment either.

The afternoon sessions took place in two rooms. In the first room, Tomoko UCHIDA spoke on the digital environment of students at Nagasaki Prefectural University, followed by graduate student Miharufu FUYUNO (Seinan Gakuin University), who presented on the effectiveness of online CALL materials for improvement of practical English skills. The third presentation by Toru MATSUZAKI (Chikushi Matsuzaki) discussed the effectiveness of using voice files in English pronunciation testing.

Although this line-up was highly attractive, I chose instead to attend the second series of presentations in room 2. Here, the first presenter was Masataka WATANABE, an in-service teacher at Senshu University Tamana High School, who is currently also a graduate student at Kumamoto Gakuen University. His presentation focused on the effects of “teacher factors” on the motivation of high school students, with the somewhat unexpected conclusion that “kind” teachers had a negative effect on student motivation. The husband-wife team of Sachiyo and Kazuya KAWANAMI (Kurume University, Ohori Senior High School) followed with a presentation in English which followed up on the theme of the morning sessions—the problem of insufficient teacher training for English at elementary schools. Their results indicated that although in-service teachers do



feel anxiety at having to teach English, they have also in general risen to the challenge with enthusiasm and success. Finally, Anne CRESCINI (University of Kitakyushu) gave a unique account of the ability of Japanese native speakers residing in the US to distinguish between “Japanese English” such as “baby car” and US English. Not unsurprisingly, long-term residents show a higher ability to differentiate the two, but interestingly results varied highly both for individual respondents and individual words.

After the final closing ceremony at which Shigerufu TAKENO of Miyazaki Municipal University (宮崎公立大学) invited the attendees to next years’ conference in 2012, there was a reception on campus, which I was unfortunately not able to attend due to the Kurume conference. Moving between the two conferences, however, gave me a unique chance to reflect on the role of technology in English education and differing approaches to its use by the mainly-Japanese membership of LET as contrasted with the mainly-non-Japanese members of JALTCALL. At the latter conference, the focus is clearly on “newfangled technology” such as Ipads and cloud computing, with their pedagogical possibilities coming in second. On the other hand, as this year’s theme demonstrates, LET-KO puts its first priority on the needs of English education in Japan, and how to blend technology to maximize results.



第51回外国語教育メディア学会全国研究大会に参加して

仲 山 雄 二 (熊本県立大津高等学校)

2011年8月6日から8日までの3日間、名古屋学院大学白鳥キャンパス(名古屋市)で、第51回外国語教育メディア学会全国研究大会が行われました。

6日は、先ず恒例のワークショップが行われ、全国から多くの先生方が参加されました。ここでは、「Rによるデータ分析入門」に参加させていただきましたが、ソフトのダウンロード方法から、操作法、成績データの視覚化や統計処理など、初学者にもわかりやすく展開されており、おおいに充足感を得ることができました。

開会式では、竹内理会長が、3月11日の東北大震災をうけ、被災された方々を思い、開催について熟慮され、開催することによって東北にエールを送る思いで決定された経緯を説明されました。

市民フォーラムでは、愛知県のALTの先生方2人に、小中学校での4技能の重点の学年ごとの違いやALTとJTEとの望ましい協力姿勢などのヒントを、実践例をもとにVTRを交えて楽しく発表いただきました。河木恵美子元校長からは、教育現場の慌たしさを踏まえつつも、ALT頼みでなく、ホームルームティーチャーの主体的なSyllabus作成や計画性が授業をより活性化させると話されました。

7日の基調講演では、名古屋大学大学院の玉岡賀津雄先生が、「第2言語の文構造の獲得—日本語学習者の文理解のメカニズム」と題して講演され、日本語の正順語順とかき混ぜ語順との処理速度の違いを検証し、中国語母語話者による日本語学習の到達度を学習レベル別に分析されたものでした。この研究を元に、第2言語獲得についての解析方法を見

つけていく必要があることを言及されました。

この後、大会テーマである「外国語学習における自律性と継続性」にもとづき、公募シンポジウム、賛助会員デモンストレーション、研究発表・実践報告、ポスターセッション等が2日間にわたりおこなわれました。

発表では、CALL教材やe-learning、オンラインやモバイルツールを利用したものに関する発表から、音読、シャドーイング、映画やDVDを用いた視聴覚教材、そして協働学習、学習方略、動機付け、多読など、LE T学会でこれまで多く取り上げられてきたテーマを、検証データを元に精緻に分析され、さらなる課題を追求されている発表が数多く見られました。発表は大学での試みが大多数を占めているのですが、私は、高校で学び巣立っていった生徒たちがどんなふうに学んでいるのか、大学の先生方が学生たちにどのような点に配慮されて講義をなさっているのか、また第二言語獲得に際し学問的にどのような考察を行っていくことが大切か、などを学ばせていただく貴重な機会だと考えており、今回も興味深く聞かせていただきました。

今回特に印象に残ったのは、8日大会最後の全体シンポジウムでした。「映像メディアは英語学習者の自律性・継続性を実現するか」と題し、4人のパネリストからそれぞれ発表がなされました。広島国際大学の角山昭彦先生は、映画のDVDを活用した指導で、リスニングだけに終わらない演習の工夫が大切と強調され、ABの2人の会話を、片方の音声消して発声させることにより学習動機を高める工夫を紹介されました。名古屋市立平針中学校の松葉明先生は、映画を授業に効果的に取り入れるタイミングや方法などについて、

様々な映画を紹介されながら話をなされました。岐阜工業高等専門学校(ぎふこうぎょうこうとうせんがく)の亀山太一先生は、映像メディアを英語学習に利用することの意義や効果について、学習者の内在する欲求によって行動されるものだと話されました。その上で、英語でのリスニングやリピーティングではなく、鹿児島弁の弁論大会のVTRを用いて、その難解さを体感する試みは大変斬新なもので、大いに会場を沸かせました。関西大学の竹内理先生は、授業外の学習の場をどのように増やすかについて言及され、メディアの新奇性に心を奪われることなく、「産物」より「過程」を重視した自己調整学習をメタ認知や情意面に配慮した工夫、学習環境の整備により、自律・継続を目指すことで締めくくられました。

私は、学会や研究会に参加することで、言

語観や教授法について考えを新たにすることができていることを楽しみにしています。また、発表を通じて先生方の著書の行間に込められた意図や意思を感じられることも嬉しく思います。また、ここで学んだことを授業に活用した時に、生徒たちの表情や瞳に驚きや発見、やる気に満ちた姿勢を感じ取ることができた時には、英語の教師をしていてこのうえない喜びを感じることができます。しかし、それらが果たして生徒たちの学習意欲の向上や実力の養成に本当に効果があったかどうか確かめるには、今回ワークショップで学ばせていただいた「Rでの教育データ分析」を通じ、日々検証し研鑽を重ねていきたいと思っています。今回も参加させていただいたことで、貴重な機会をいただいたと有り難く思っています。



LET 学会賞受賞にあたり ― 教材作成よもやま話 ―

染 矢 正 一 (大分県立芸術文化短期大学)

2011年度 LET 学会賞教材部門賞を受賞された染矢先生に、教材作成についてのご苦労話をうかがいました。素材を集め、編集し、教室内での実際の運用がスムーズにいくように色々と工夫をこなされて完成された教材は、まさに先生の「職人」ともいえる技と「愛情」に満ちた産物と言えそうです。

(1) 先生にとって「これまでに一番思い出に残っている教材」は何でしょうか？

その都度思い出はありますが、一番の思い出に残っている教材は『教室英語表現事典』です。これは1993年に大修館書店から上梓したのですが、原稿の執筆に10年以上費やしました。その当時、「英語の授業はできるだけ英語で行うことが学生の英語力を高めることにつながるのではないか」という考えを持っていましたので、英語の授業のなかで、始業から終業までの教員と学生（生徒）の activity を、いろいろな状況に分けて、教室で使う英語表現を分類整理して作成したのがこの本です。

当時はまだパソコンのなかった時代です。まとまった時間はさほどありませんでしたので、細切れの時間を利用して、ワープロに少しずつ書きためていきました。10年が過ぎて原稿の整理段階に入ったところ、同じようなことを何度も書いていることに気がつきました。重複部分を整理して、最終的には707ページの本にまとめました。

(2) 「これまでで一番作成に苦労をされた教材 *World Heritage on DVD*」についてお聞かせいただけますか？

今回 LET 学会賞教材部門賞を受賞した



World Heritage on DVD (『DVD で学ぶ世界遺産』は、自分で海外の世界遺産を訪れ、撮影した素材をすべて使っています。日頃は授業がありますので、夏休みや春休みを利用して海外取材を行いました。海外へは自費で行きました。

海外での撮影情報は日本ではわからないこともあります。ビデオ撮影可能なはずが、現地を訪れるとそうではなかったり、ビデオ撮影は可能ながら、三脚使用は禁止の場合などもあります。教材作成を念頭に入れたビデオ撮影では、三脚の使用は安定した画像を撮るには不可欠です。また、限られた旅程のなかで、予定していた撮影が、雨のために中止せざるを得なくなることもあります。

世界遺産を訪れ、ビデオ撮影して帰国してからでも煩わしい作業が待っています。画像の編集です。編集が終わったら、今度は、画像に合うようにナレーションの英文作成があります。さらに、学生がいろいろな作業ができるような問題作成を行うと、全体的にはかなりの労力と時間を要しました。*World Heritage on DVD* は、最も作成に苦労した教材といえそうです。

(文責編集：田上 優子)

＊～＊～＊～＊～＊～ 事務局からのお知らせ ～＊～＊～＊～＊～＊

【新会員】2011年5月20日以降（50音順）

<正会員>張 允馨（北九州市立大学）

中原久枝

福田真人

【2011年度秋季学術講演会】

以下の日程で2011年度秋季学術講演会が開催されます。今回は、2011年度 LET 教材開発賞を受賞された、染矢正一先生に教材開発についてお話いただく予定です。懇親会に参加をご希望の方は、11月28日(月) までに事務局までご連絡ください。

日 時：2011年12月3日(土)15:30～17:00

会 場：西南学院大学2号館 大会議室

<http://www.seinan-gu.ac.jp/>

[campusmap.html](#)

講 師：染矢正一先生

（大分県立芸術文化短期大学）

演 題：教材開発の実践と作成手順

参加費：無料

懇親会：さうお天神店 会費 5,000円

（講演会終了後、マイクロバスで移動します。）

懇親会申込先：支部ホームページ

（<http://www.j-let-ko.org/htdocs/>

?page_id=18）よりお申し込みください。

【第42回支部大会】

第42回支部大会が以下の日程で開催されます。

日 時：2012年6月9日（予定）

会 場：宮崎公立大学（宮崎県宮崎市）

大会テーマ：（仮）「Treasure Hunt: Web の
中から魅力的な教材を発掘しよう！」

口頭発表受付：2012年1月中旬より（予定）

【第52回全国大会】

第52回 LET 全国大会が以下の日程で開催されます。

日 時：2012年8月7日から9日

会 場：甲南大学（兵庫県神戸市）

【支部研究プロジェクト】

今年度の締め切りは2012年2月末日です。多くのプロジェクトの応募をお待ち申し上げます。詳細につきましては、支部ホームページのプロジェクトに関する規定をご覧ください。

【会費納入のお願い】

2011年度までの会費をまだ納入されていない会員の方は、お早めにお振り込みいただきますようお願いいたします（個人会員・団体会員は6000円、学生会員は3000円）。未納の状態が続く場合には支部からの発送物を停止させていただく場合がございます。支部の円滑な運営の為にもご協力をお願いいたします。なお住所・所属等に変更が生じた場合には、学会本部のHPより変更していただきますようお願い申し上げます。

【LET ホームページ】

<LET 本部> <http://www.j-let.org>

<LET 九州・沖縄支部>

<http://www.j-let-ko.org/>

【LET 九州・沖縄支部事務局】

〒808-0135 北九州市若松区ひびきの1-1

北九州市立大学 長 加奈子研究室内